

第 5 回 破壊統計

無機材料工学科
准教授 安田公一

1. はじめに

破壊力学の講義で述べたように、セラミックス中にはき裂状の欠陥が存在するが、それ以外にも、図 1 に示すように、気孔・粗大結晶粒・不純物・加工損傷などの欠陥も存在し、これらも破壊原因になっている。すなわち、破壊原因が複数存在し、かつ、その各々の欠陥寸法も分布しているため、多数の試験片の破壊試験をした時に、各試験片の最弱欠陥が、いつも同じ破壊原因で、かつ、同じ欠陥寸法であるとは限らない。このため、セラミックスの破壊応力はかなりばらつくことになり、統計的な処理がどうしても必要となってくる。今回の講義では、まず、最初に破壊原因が 1 種類の場合の単一モードワイブル分布を用いて破壊統計の基本概念を説明した後、複数の破壊原因を考慮した競合モードワイブル分布を説明することにする。

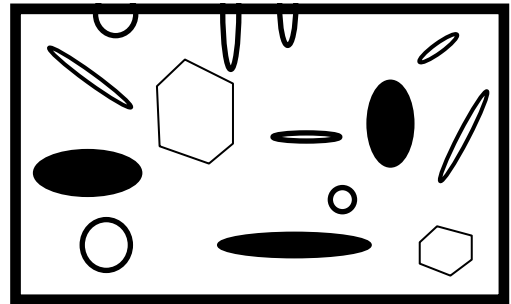
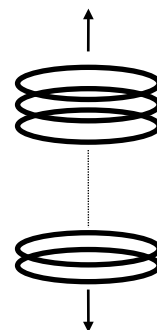


図 1 セラミックス中の欠陥

2. 最弱リンク説と単一モードワイブル分布

セラミックスのように、多数の欠陥が内在し、その中の一番弱い欠陥（最弱欠陥）から破壊が始まることが部材全体の破壊に至る場合には、『最弱リンク説』によってその破壊挙動を説明することができる。すなわち、図 2 に示すように、 n 個の輪が直列に連結した 1 本の鎖を考える。これに外部応力を負荷した時、この鎖の破壊応力は最も弱い輪の破壊応力で決まるという考え方が最弱リンク説である。これを数学的に記述する前に、破壊統計における分布関数と密度関数という言葉の定義をしておく。分布関数を $F(\sigma)$ 、密度関数を $f(\sigma)$ とすると、両者の間には次式の関係が成立する。



n 個の輪を直列につないで 1 本の鎖とする。

図 2 最弱リンク説

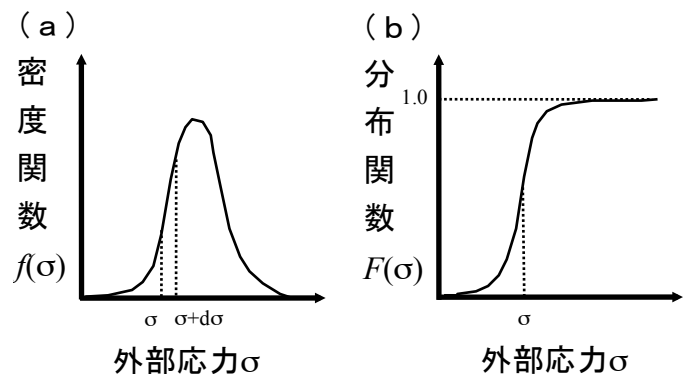


図 3 密度関数と分布関数

$$F(\sigma) = \int_0^{\sigma} f(t) dt \quad (1)$$

ここで、図 3 に示すように、 $f(\sigma)d\sigma$ は外部応力を σ から $\sigma + d\sigma$ まで増加させる間に試験

片が破壊する確率を表す。したがって、 $F(\sigma)$ は外部応力を 0 から σ まで増加させた時に破壊する試験片の割合を意味し、破壊確率とも呼ばれている。

では、輪(ring)の分布関数と密度関数を $F_{ring}(\sigma)$ と $f_{ring}(\sigma)$ とし、鎖(chain)の分布関数と密度関数を $F_{chain}(\sigma)$ と $f_{chain}(\sigma)$ とする。簡単のため、A、B、C の 3 個の輪から成る鎖の場合について、輪の分布関数 $F_{ring}(\sigma)$ と鎖の分布関数 $F_{chain}(\sigma)$ の関係を求めてみよう。

図 4 に示したように、各々の輪の破壊応力の分布（密度関数）は $f_{ring}(\sigma)$ で表されるので、その中から任意に 3 個の輪を取ってくると、例えば、A、B、C の輪の破壊応力の値は図中の点線のレベルで示される。この場合、この 3 つの輪で鎖を作ると、結局、鎖の破壊応力は輪 B の破壊応力となる。3 個の輪の選び方は任意なので、いろいろな場合について考えてみると、鎖の破壊応力は、輪の破壊応力の密度関数の左側の裾野に分布することになる。これを数学的に表現すると次式となる。

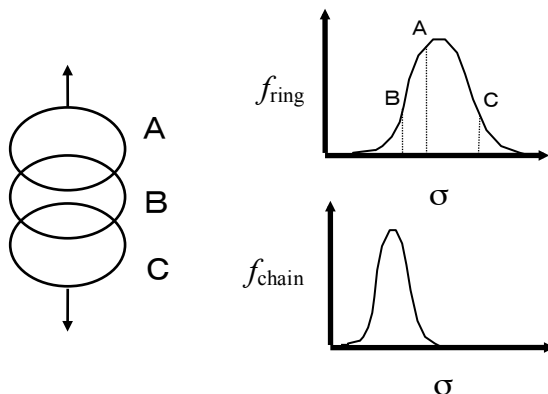


図 4 輪と鎖の密度関数の関係

$$1 - F_{chain}(\sigma) = \{1 - F_{ring}(\sigma)\} \{1 - F_{ring}(\sigma)\} \{1 - F_{ring}(\sigma)\} \quad (2)$$

これは、ある外部応力 σ の時に鎖が壊れない確率は、輪 A で壊れずに、かつ輪 B で壊れずに、かつ輪 C で壊れない確率になるということを意味している。一般に、 n 個の輪の場合は次式となる。

$$1 - F_{chain}(\sigma) = \{1 - F_{ring}(\sigma)\}^n \quad (3)$$

最弱リンク説は破壊応力の小さい側が破壊を決めるので、 $F_{ring}(\sigma) \ll 1$ とすることができ、(3) 式は次式で近似できる。

$$1 - F_{chain}(\sigma) = \exp \left[\log \{1 - F_{ring}(\sigma)\}^n \right]$$

$$\cong \exp \{ -n F_{ring}(\sigma) \}$$

$$\therefore F_{chain}(\sigma) = 1 - \exp \{ -n F_{ring}(\sigma) \} \quad (4)$$

これより、鎖の分布関数 $F_{chain}(\sigma)$ は輪の分布関数 $F_{ring}(\sigma)$ だけでなく、鎖を構成する輪の数 n にも依存することがわかる。さらに n が十分大きくなった時に、鎖の分布関数 $F_{chain}(\sigma)$ がどのような関数に漸近するかについては、極値統計論によって既に解かれていて、次式のワイブル分布関数 $F(\sigma)$ およびその密度関数 $f(\sigma)$ となる。

$$F(\sigma) = 1 - \exp \left\{ -\frac{V}{V_0} \left(\frac{\sigma}{\sigma_0} \right)^m \right\} \quad (5)$$

$$f(\sigma) = \frac{V}{V_0} \frac{m \sigma^{m-1}}{(\sigma_0)^m} \exp \left\{ -\frac{V}{V_0} \left(\frac{\sigma}{\sigma_0} \right)^m \right\} \quad (6)$$

ここで、 m はワイブル分布の形状母数、 σ_0 は尺度母数と呼ばれ、図5に示すように分布の範囲や位置を特徴づけるパラメーターである。また、 V は試験片体積、 V_0 は単位体積であり、 V/V_0 の比は（4）式中の輪の数 n と同じ意味を持っている。図6のように寸法の異なる引張り試験片のデータを比較する時にも、このようにすると、尺度母数が単位体積を有する試験片の値として得られるので便利になる。また、（5）式よりワイブル分布には試験片の体積によって破壊応力が変わるということが自動的に組み込まれていて、脆性材料の破壊応力に関する体積効果が表現されている。

では次に、実際の破壊応力データから、どのようにワイブル分布のパラメーターを推定するかについて説明する。推定法には、ワイブルプロットによる方法と最尤法がある。まず、ワイブルプロットによる方法については、（5）式の2回対数を取って整理すると次式が得られる。

$$\ln \ln \frac{1}{1-F(\sigma)} = m \ln \sigma + \ln \frac{V}{V_0 (\sigma_0)^m} \quad (7)$$

これより、縦軸に $\ln \ln \frac{1}{1-F(\sigma)}$ を、横軸に $\ln \sigma$ をプロットすると、図7のように直線関係が得られ、この直線の傾きから形状母数 m が、推定直線上の任意の点の座標から尺度母数 σ_0 が求められることがわかる。具体的にやってみると次のようになる。

まず、 n 本の試験片の引張り試験を行って、破壊応力データセット $\{\sigma_f^i\} (i=1, n)$ を得たとする。しかし、これだけではワイブルプロットできないので、各破壊応力データ σ_f^i に破壊確率 F_i を割り当てなければならない。それは次式の平均ランク法を用いて行う。

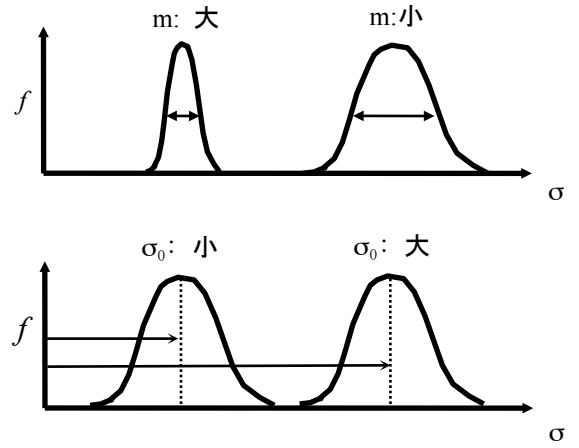


図5 形状母数と尺度母数の意味

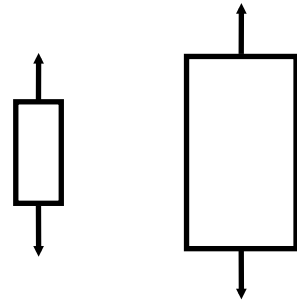


図6 寸法の異なる試験片

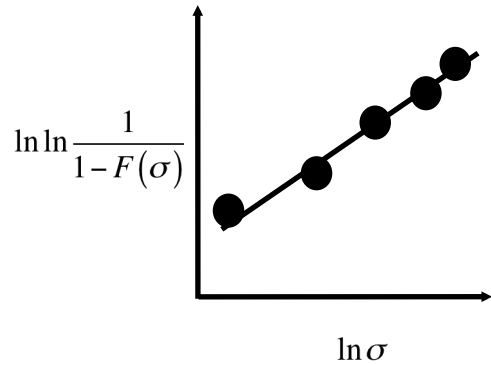


図7 ワイブルプロット概念図

$$F_i = \frac{i}{n+1} \quad (8)$$

ここで、 i は順序数であり、各破壊応力データを小さい順番に並べた時の順位を表す数である。

例えば、データセットとして $\{\sigma_f^i\} = \{101\text{MPa}, 97\text{MPa}, 105\text{MPa}\}$ という 3 つのデータが得られた場合には、

破壊応力 σ_f^i	101MPa,	97MPa,	105MPa
順序数 i	2,	1,	3
破壊確率 F_i	$\frac{2}{3+1} = 0.5,$	$\frac{1}{3+1} = 0.25,$	$\frac{3}{3+1} = 0.75$

となる。このように平均ランク法を用いると、変域が 0 から 1 までの破壊確率 F_i に均等に破壊応力データを分布するように割り付けることができる。これで、各破壊応力データ σ_f^i に破壊確率 F_i が割り当てられたので、実際に (7) 式のワイブルプロットが可能となり、形状母数 m や尺度母数 σ_0 が推定できることになる。

次に、最尤法について説明する。前述したように、密度関数 $f(\sigma^*)d\sigma$ は外部応力 σ が σ^* から $\sigma^* + d\sigma$ の間で破壊する確率を意味する。この σ^* の代わりに、任意の破壊応力データ σ_f^i を代入すると $f(\sigma_f^i)d\sigma$ となり、これは外部応力 σ が σ_f^i から $\sigma_f^i + d\sigma$ の間で破壊する確率を与えることになる。したがって、 n 個の破壊応力データからなるデータセットが得られる確率（すなわち、 $\sigma_f^1, \sigma_f^2, \sigma_f^3, \dots, \sigma_f^n$ という破壊応力の組み合わせが出現する確率）は次式で表される。

$$\begin{aligned} \prod_{i=1}^n f(\sigma_f^i) \underbrace{d\sigma \cdots d\sigma}_n &= \prod_{i=1}^n f(\sigma_f^i : m, \sigma_0) \underbrace{d\sigma \cdots d\sigma}_n \\ &\equiv L(m, \sigma_0 : \sigma_f^i) \underbrace{d\sigma \cdots d\sigma}_n \end{aligned} \quad (9)$$

ここで、この右辺の関数 L を新たに尤度関数と定義し、ワイブル分布の形状母数 m と尺度母数 σ_0 の関数であると読み換えてみる。すると、この尤度関数 L を最大とする（すなわち、 $\sigma_f^1, \sigma_f^2, \sigma_f^3, \dots, \sigma_f^n$ という破壊応力の組み合わせが出現する確率が最大になる）ような形状母数の推定値 $\hat{m}$ と尺度母数の推定値 $\hat{\sigma}_0$ が得られれば、 n 個の破壊応力データ $\{\sigma_f^1, \sigma_f^2, \sigma_f^3, \dots, \sigma_f^n\}$ が実際に得られた時の真の形状母数 m と尺度母数 σ_0 に最も確からしい値を与えるものと考えることができる。これが最尤法の考え方である。具体的には (6) 式を (9) 式に代入して、次式を解けば良い。

$$\left. \begin{aligned} \frac{\partial \ln L}{\partial m} &= 0 \\ \frac{\partial \ln L}{\partial \sigma_0} &= 0 \end{aligned} \right\} \quad (10)$$

その結果，次式を得る．

$$\frac{n}{m} + \sum_{i=1}^n \ln \sigma_f^i - \frac{n \sum_{i=1}^n (\sigma_f^i)^m \ln \sigma_f^i}{\sum_{i=1}^n (\sigma_f^i)^m} = 0 \quad (11)$$

$$\sigma_0 = \left\{ \frac{1}{n} \left(\frac{V}{V_0} \right) \sum_{i=1}^n (\sigma_f^i)^m \right\}^{\frac{1}{m}} \quad (12)$$

(11) 式は非線形方程式なので，2分法あるいはニュートン法などの数値計算によって近似解を見いださなければならない．以上が，単一モードワイブル分布を用いた破壊統計の基本的な概念である．

3. 競合モードワイブル分布

本節では，複数の破壊原因を考慮した競合モードワイブル分布について説明する．イメージしやすいようにセラミックスの破壊から暫く離れて，人の死を例にしたい．図8 (a) に示したように，ある漁村Aの人々は塩辛いものが好物のため，かれらの死亡原因は脳溢血だけであった．例えば， a_1 さんは31歳で， a_2 さんは65歳で，そして a_3 さんは71歳で脳溢血により死亡したとする．したがって，この村の死亡確率 $F_A(y)$ は次式の単一モードワイブル分布で表せる．

$$F_A(y) = 1 - \exp \left\{ - \left(\frac{y}{y_{0A}} \right)^{m_A} \right\} \quad (13)$$

ここで， y は年齢を表す．また，(5) 式中の V/V_0 項は省略した．一方，図8 (b) に示したように，近くの山村Bの人々は肉食中心のため，かれらの死亡原因は心臓病だけであった．例えば， b_1 さんは35歳で， b_2 さんは48歳で， b_3 さんは78歳で心臓病により死亡したとする．したがって，この村の死亡確率 $F_B(y)$ も次式の単一モードワイブル分布で表せる．

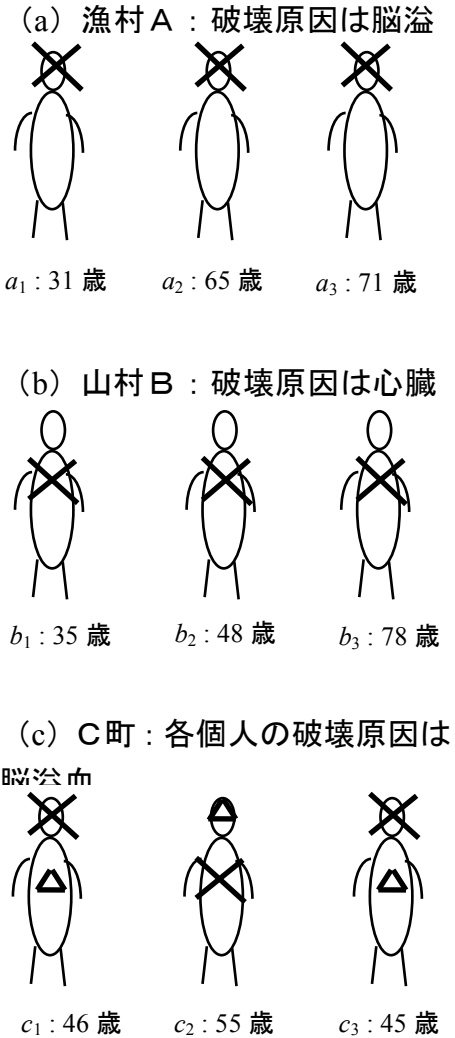


図8 競合モードワイブル分布

$$F_B(y) = 1 - \exp\left\{-\left(\frac{y}{y_{0B}}\right)^{m_B}\right\} \quad (14)$$

ところが、ある時大地震が起きて、漁村Aも山村Bも壊滅的な被害を受けたとする。その後、両方の村で話しあって、中間の平野部に新たにAB村を合併して作ることにした。合併直後は、出身村での食生活がそのまま反映されていたので、漁村Aから来た人は相変わらず脳溢血でだけ死亡し、山村Bから来た人は相変わらず心臓病だけで死亡していたとする。この場合のAB村の死亡確率 $F_{AB}(y)$ は次式の混合モードワイブル分布で表せる。

$$F_{AB}(y) = p_A \left[1 - \exp\left\{-\left(\frac{y}{y_{0A}}\right)^{m_A}\right\} \right] + p_B \left[1 - \exp\left\{-\left(\frac{y}{y_{0B}}\right)^{m_B}\right\} \right] \quad (15)$$

ここで、 p_A は漁村Aからきた人の人口割合、 p_B は山村Bから来た人の人口割合である。混合モードワイブル分布については、ここでは詳しく述べないが、死亡原因は複数あるが、一人一人の死亡原因は1種類であって、そのような人々が混合した場合の分布関数となっている。

その後、数世代を経てAB村は発展し、C町になった。その頃には漁村Aの食文化と山村Bの食文化が融合し、C町の人々は塩辛いものも食べるし、肉食もするようになった。その結果、C町の人々の死亡原因には脳溢血と心臓病の両方が考えられるようになった。例えば図8(c)に示すように、 c_1 さんは脳と心臓のどちらにも危険因子を持っていたが、結局、42歳で脳溢血で死亡し、 c_2 さんもどちらの危険因子も持っていたが、結局、55歳で心臓病で死亡し、 c_3 さんもどちらの危険因子も持っていたが、結局、65歳で脳溢血で死亡したような場合である。この場合の死亡確率 $F_C(y)$ は次式の競合モードワイブル分布で表せる。

$$\begin{aligned} F_C(y) &= 1 - \exp\left\{-\left(\frac{y}{y_{0A}}\right)^{m_A}\right\} \exp\left\{-\left(\frac{y}{y_{0B}}\right)^{m_B}\right\} \\ &= 1 - \exp\left\{-\left(\frac{y}{y_{0A}}\right)^{m_A} - \left(\frac{y}{y_{0B}}\right)^{m_B}\right\} \end{aligned} \quad (16)$$

この(16)式は、ある年齢 y で死亡しないということは、その年齢で脳溢血でも死亡せず、かつ、心臓病でも死亡しないということを表している。すなわち、各個人の死亡原因としては脳溢血と心臓病の2種類考えられるが、両者の死亡原因が競合した結果、最終的にどちらかの死亡原因で死亡するということになる。したがって、(15)式の混合モードワイブル分布とは、意味が全く異なることがわかる。

図1に示したように、セラミックスは1つの試験片の中にも複数の破壊原因が存在し、それらの競合の結果、ある試験片は気孔が最弱欠陥として破壊し、また、別の試験片では破壊原因の競合の結果、未焼結部分のき裂状欠陥が最弱欠陥となって破壊するというのが現実である。したがって、セラミックスの破壊応力分布を厳密に解析するには、競合モードワイブル分布を使う必要がある。